

## (2) 事業の総括概況

本学校法人北星学園の2016年度における事業の運営総括概要は、以下のとおりである。

### 2016年度 学園運営総括

理事長 大山 綱夫

#### はじめに

2016年度を歩み出すにあたって北星学園は、学園目標を「キリストに結ばれる学園」とし、年間聖句を「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」(ヨハネによる福音書 15 章 5 節)と決めました。学園目標も年間聖句も本学園の成立・存在の根拠と、そこに属する者、とりわけ働く者が意識すべき恵みと責務とを、指し示すものでありました。ややもすれば営為の完璧を目指すあまり、それに先立つ立脚点の確認を怠ることのないように、具体的には事に当たっては必ず、学園の建学の精神に立ち返ることを訴えるものでありました。そのことを胸に、神に「良し」とされる学園作りが出来るようにと歩んでまいりました。

2015年度より持ち越された課題のうち、最も緊急の対応を求められたのは、2008年12月策定の「北星学園教育の将来構想」以来の懸案であった余市高等学校の将来に関わるものでした。学園理事会は、学園内外の様々な議論や要望等も踏まえ、5月26日、7月7日、及び9月7日と3回にわたり慎重に審議を行いました。その審議は、存続を困難ならしめる社会的諸状況のなかでも託された使命を継承する可能性の有無、あるいは新たな決断の必要性等、厳しい検討をともなうものでありました。学園は、そこでなされた決定に基づき祈りをもって力を尽くします。

2016年は、翌2017年度に予定される創立130周年記念事業の準備を進めた年でもありました。すでに2014年秋には、130周年記念誌編集委員会が発足しその作業に取り掛かっていましたが、学園では2016年4月26日の常任理事会で「北星学園創立130周年記念実行委員会」の設置を決定し、記念事業全般の企画・調整・実施にあたることとなりました。企画のいくつかは、すでに調整・準備の段階に入り、2017年度へ引き継がれることになっています。

以下7項目は2016年度の学園運営方針・計画に対応するものです。

#### 1. 「建学の精神」に基づく教育の現代化について

スミス先生が書かれた「学校の根本理念」は、歴代の後継者たちが大事に引き継ぎ、いまま学園全体の教育実践を支える根本理念です。そこに書かれたことばの背景には、彼女が目にした19世紀後半の日本の女子教育の姿があったでしょう。しかし、彼女のことばには時代を越える内実と訴えがあります。そのゆえに後継者たちはそれぞれが置かれた時代状況のなかで、その時代のニーズに応じて、スミス先生の目指したものを「現代化」しようと努めてきました。21世紀に入って以来、顕在化し、教育の現場が突きつけられている重い課題のひとつは、いまAIということばに象徴されている、IT技術の革新に伴う社会・文化状況の変化に曝されている世代への知識・文化の伝達のあり方でしょう。本学園内でも、さまざまな努力が聞かれますが、その一端は学園内諸刊行物で窺うことができます。本学園の特色である、中学校・高等学校に対する「政策予備費」も、より良い「現代化」援助の一助となればと願っています。

なお年度末に刊行された『北星教育と現代』第5号には、学園ならではの「現代化」の実践例が詳しく報告されています。また巻頭の「特集 北星学園余市高等学校」には、2編の論考が寄せられました。その1編は従来の議論にはなかった観点からの問題提起を含んだものであり、対論としての受け止めと今後の議論の展開を願っています。

## 2. 学園としてのより緊密な連携強化について

この年度、主な学園内での行事は夏期の学園教職員研修会、クリスマスツリーの点灯式、学園互助会クリスマスで例年通りに行われました。点灯式を12月1日に一斉に実施するのは難しく、各校別々の日程で行われました。また互助会クリスマスのあり方も工夫が必要であるとの意見も出ています。

学園研修会は1日を通して、教員と事務・用務職員が合同で開催されました。主題は「みんなで考える各校のアピールポイントー学園内の各校について相互理解を深めるためにー」で、基調講演は森孝一神戸女学院理事長・院長で、道徳の教科化等、今日の教育問題が話され参考になったこと、各校からの質問に回答する校長、学長の報告会も毎年実施して欲しいなどの意見が出されました。また、新しい試みとして分散会を取り入れ、小グループでの交流によって積極的な参加ができたことなどが好評でした。しかし、討論のテーマや実施方法など、さらに周知な準備が必要とされています。

学園教育連携委員会では、「学園内高校推薦入学者の個人情報開示」を実施して3年目となり、所期の目的に照らして進路指導等に有効活用の有無を吟味する必要があります。一方、大学からの「高校向け指定推薦図書」の一覧や学園内各校間での参加や見学可能な授業や行事について提示していますが、その利用・実施状況の把握が必要です。

中学高校に配分されている政策予備費は2016年度から上限が20,000千円になりましたが、最終的な実施状況は総計13,692千円でした。今後は、各校均等配分ではなく、必要な教育政策を勘案しての支出も検討課題です。各校のイベントには各自で参加しましたが、共同での実施は「北星文化展」のみでした。出展作品の各校片寄よりもあり、今後の実施については新たな方針や取組みが必要です。

## 3. 中等教育部門の今後のあり方について

学園総合企画委員会において、2010年11月にまとめた「魅力ある学校づくり」に対応する各学校の取組状況及び取組計画を確認しました。次年度以降は、それらの取組みが実効あるものとなるよう学園として点検・支援していくこととなります。

「余市高校の今後のあり方」については、「余市高校維持の3条件（1年次生の入学者数、教職員数及び収支差額超過額）」を昨年9月の理事会で決定しました。その後、この3条件を満たすための取組みを進める中で、北星余市高校存続を願う請願署名をしていただいた方々に対し、お礼と理事会決定内容の報告を目的とした文書を郵送しました。この郵送した文書について、その内容の不十分さ、あるいは個人情報に関する指摘などを受ける結果となりました。今後このようなことが起こらないように留意してまいります。

## 4. 新給与体系への取組みについて

学園財政を長期安定させるためには、人件費比率の改善が課題であり、そのための新たな給与体系の策定と移行が必要となります。具体的には、学園人事制度検討委員会を中心に取組んでおり、一昨年度のアンケート調査（①職場環境、②給与、③学園）に引続き、外部委託による給与体系に関わる諸問題の整理と新給与表案づくりを進めました。今後は、3月末に確認した「新給与体系の策定に係るロードマップ」に従い、新体系具体化のための課題等の継続的整理と移行措置の具体案策定等に取組みます。

## 5. 財政健全化への取組みについて

前年度策定した「中期財政試算」を基に、「各学校の入学者数と人件費の将来見通し」などの分析を進めてきました。

学園の財政健全化には、学園全体の財務構造の転換を図ることが課題であり、特に人件費及び人件費比率が重要となることから、学園人事制度検討委員会との連携した取組みが求められます。

次年度は、社会情勢などを含む総合的な分析をさらに進め、学園全体の中・長期の財政計画の策定に取り組めます。

## 6. 北星学園キリスト教センターの運営について

宗教主任会議と連携して、キリスト教センター運営委員会を中心に学園内のキリスト教教育の課題に取り組んできました。2名の専門スタッフを配置し、センターを開設してから5年目を迎えました。その終了時に『所蔵資料目録』を発行しましたが、引き続き日常的に学園内外の資料の収集、整理、保存に務めました。大学のC館に新しくセンター室を設けるなど、これまでの執務環境に加えてより良い活動を展開してきています。

今年度、新しいスタッフの着任によって、大学のチャプレン業務の援助、その他学園や各校のキリスト教行事の参画にあたり、懸案のキリスト教教育を一步進めることができたと言えます。年一回のセンター報『北星教育』(8号)、年報『北星教育と現代』(第5号)を発行し、6月には牧師との交流会、11月には教育実践の講演会を実施して学園のキリスト教教育の発展に努めました。

3回目を迎えた「学園内推薦入学者の集い」を3月末に実施しました。礼拝のあと、グループごとに大学内の施設を周り、教職員や学生を訪問し問答する新たな取組みがなされました。ユニークで積極的な参加の形を生かしつつ、今後は目的に沿った内容の検討や参加人数対策として実施時期の配慮が必要です。

2017年の学園130周年に向けて記念誌『サラ・スミスと女性宣教師—北星学園を築いた人々—』の編集作業が大詰めに来ておりますが、当センターのスタッフの援助もあって概ね順調に進められてきました。

## 7. 事務組織改編に伴う点検等について

事務局の役割は、昨今の学校法人運営及び大学・短大の教育研究展開に伴って大きく変化してきています。これらの変化に対応できる組織への転換と人員の再配置を主たる目的として、2016年度に事務組織の改編を実施しました。

改編後の新事務組織について、事務管理職による「新事務組織体制及び職員配置数の点検」を行ったので、その点検結果を基に、期待される業務展開と職員の業務分担の適正化に取り組んでいきます。

以 上